

頑張れ！パンチラ先生

坂田三允 (群馬県立精神医療センター看護部長)

週間文春の書評で、米原万里が取り上げていた本である。彼女も書いていたけれど、これを書店で購入するにはちょっとした勇気が必要だ。なにしろ表紙がすごい。薄いクリーム色の地に、黄色の星の模様のある真っ赤なパンツをはいた今風の若いおねえちゃん（言葉は悪いがそう表現したくなる）が股覗きしている絵だ。帯封はピンクで、しかも「あなたは、ウレシイか？」という白抜きの文字のみ。「別にウレシくないよ」とつぶやきながらも買うしかないのだ。

しかし、副題に羞恥心の現代史とあるように、これは羞恥心がいかにして形成されていったかということについての、本当に真面目な研究書なのである。

白木屋ズロース伝説を否定するところから本書は始まる。白木屋伝説といっても、今の若い人々には何のことやらわからないだろうが、日本橋にあった白木屋という百貨店で昭和7年に大火災があり、逃げ遅れた店員が何とか脱出しようとロープを命綱にして地面まで降りたのだが、女店員は和服でパンツをはいていなかったため、着物のすそをおさえようとして命綱をはなしてしまい落下した。パンツさえはいていたらそのような心配はなかったはずだということから、女性はパンツをはくようになったのだという伝説である。

著者はそれをあやしいと感じる。なぜなら「白木屋の火災では、合計十四名の死者がでた。うち八人は、百貨店の女店員である。あとの六人

は、みな男であった」からである。そこから著者の研究が開始される。白木屋の社史、当時の新聞の報道、婦人公論の記事などから、墜落者の状況を詳しく調べ、さらにその数年前の状況まで調べた上で、白木屋伝説を否定する。この時代、現代人が考えるような羞恥心はなかったのである。

それに続いて、パンツをはいていなかった日本の女性のほとんどがパンツをはくようになった現代まで、ズロースから白いパンツを経て現代の色とりどりのパンツに至るまでの服飾史、風俗史、生活史が羞恥心との関係の中で展開されていく。一言で説明できないのが残念だが、男と女の間にある深い河も感じられ、なかなか興味のつきない1冊だった。研究に必要なのは、疑問をつきつめようとするねばり強さだといわれるけれど、引用される資料は豊富で、本当に著者の熱意には脱帽する。

あとがきがまたおもしろい。「私はあいかわらず、パンチラをうれしがっている。十数年の歳月をかけて、パンチラが発揮する魅力のからくりを分析しつくした。にもかかわらず、今でも洗脳はとけていない。(中略)私の歴史研究はけっきょくなんの役にも立たなかった。(中略)では、なんのために、歴史へいどんでいったのか。正直に言えば、それがおもしろかったからである。(中略)(学会では興味本位の仕事は認められないが)好奇心につきうごかされてすむことこそが、ほんらいの学問だったのではないか」という著者に私は心から拍手する。 ▲



さかた・みよし

2001 年の 4 月から群馬県立精神医療センターにて看護部長の任を仰せつかることに。通勤に時間がかかるようになって、電車を書斎がわりに本をたくさん読もうと思っていたのに、つつい、ZZZZ・・・。寢室がわりになってしまっている。大きな計算違いだったわー。

●群馬県立精神医療センター：〒379-2221 群馬県佐波郡東村大字国定 2374